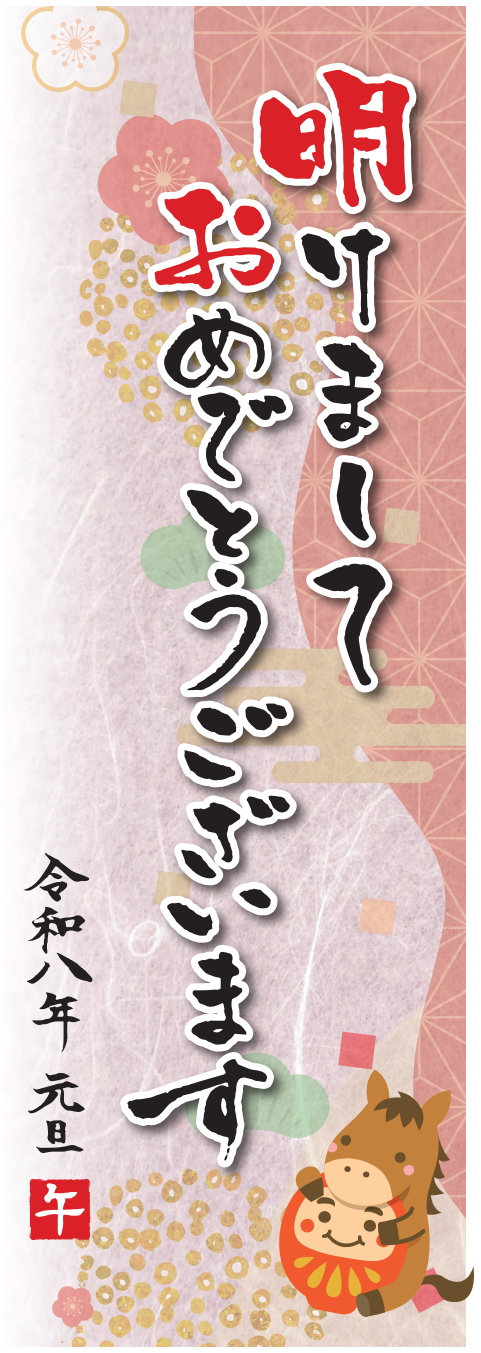
2・3面 新春特別対談
未来の公共をつくるのは誰か
新春クロスワードパズル
4面 第28回ベストショットコンクール

自治労東京

千代田区飯田橋3丁目9番3号
SKプラザ4階
電話 03-3556-3755
自治労東京都本部 企画総務局 発行
責任者 松村 誠治
編集者 西岡 芳宏
1部10円（但し組合員は組合費に含む）

「秋の日」
立川市職労　渡邊 美穂 さん
ネイチャー部門
（選評は4面に掲載）



新年のごあいさつ

自治労東京都本部
中央執行委員長
松村 誠治

ともに声を上げ、ともに支え合い、ともに進んでいこう！

新年あけましておめでとうございます。組合員の皆さま、ご家族の皆さまに、心よりお祝いを申し上げます。昨年も過酷な環境の中で、公共サービスを支え続けてこられた皆さまのご尽力に、深く敬意と感謝を申し上げます。

２０２５年、私たちは多くの課題に直面しました。物価上昇が止まらず、住宅費や生活必需品の高騰が家庭に重くのしかかり、また職場では、住民ニーズの多様化、業務の複雑化、災害対応、感染症対策、そして急速に進むＤＸ推進など、多岐にわたる業務に追われ、人手不足や長時間労働が深刻さを増しています。こうした社会情勢のなかで、働く者一人ひとりが、安心して暮らせる社会を築くために労働組合の果たす役割は、これまで以上に重要になっています。

そのような状況の中、昨年の賃金交渉は、たいへん困難な闘いでしたが、諦めることなく声を上げ続け、要求と論理を積み重ねながら粘り強く交渉した結果、高齢層等に不満を残すものの、賃金改善や昨年に引き続き再任用職員の一時金について、常勤職員同様の支給月数を勝ち取った単組があるなど多くの課題が前進しました。

とりわけ、特区連と東京清掃の闘争においては、これまで２００７年以降、18年間という長年にわたり要求し交渉し続けてきた「現業職の賃金改善」等の要求を、ようやく実現することができました。この成果は誰かの恵みではなく、働く仲間が強い結束のもとで立ちむかった「運動の力」によって勝ち取ったものです。２０２５賃金確定闘争をともに闘い抜いた組合員皆さまに、心からの連帯と感謝を申し上げます。

今、私たちに求められているのは〝ともに声を上げる勇気〟です。労働組合は、執行部だけでは成り立ちません。職場の一人ひとりの想いと行動が積み重なることで、運動となり、力となり、社会を変えることができます。小さな声のように思えても、その声が重なれば重なるほど大きな波となります。

そもそも労働組合は、悩みを希望に変え、仲間の苦しみに寄り添い、ともに立ち上がる場所です。新しい年が、誰にとっても「誇りと希望」をもって働ける一年となり、そして「自分たちの力で未来をつくる」実感を持てるように、ともに声をあげ、ともに支え合い、ともに進んでまいりましょう。

２０２６年、自治労東京都本部は、すべての仲間とともに、更に一歩を踏み出してまいります。本年もご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げ、新年の挨拶とさせていただきます。ともに、がんばりましょう。

視覚障害その他の理由で活字のままで利用できない人のために、営利を目的とする場合を除き「録音図書」「点字図書」「拡大写本」等の制作をすることを認めます。その際には自治労東京都本部までご連絡ください。

2026年新春特別対談企画

未来の公共をつくるのは誰か

―― 今、自治研活動の「可能性」を語ろう

2026年10月には、「ふくい自治研全国集会」が開催されます。その一方で一見難解な「自治研」への関心は低下しています。今回は組合員のみなさんに自治研のおもしろさと幅広さを実感していただくために、自治研活動に最前線で取り組む４人の方にお話を伺いました。自治研活動の多様な「カタチ」。それが組合員、職場、地域社会に与える「力」を知る機会になれば幸いです。

対談の全文はコチラから！

コーディネーター
自治労東京都本部
中央執行委員長
松村 誠治
まつむら せいじ

松村委員長（以下、松村） 本日はお忙しい中お集まりいただき、ありがとうございます。２０２６年のふくい自治研を控えた今、私たち自治労東京は、自治研活動の活性化を重要な課題と捉えています。本日は、皆さんの実践を通じて「自治研は難しいものではなく、日常業務を支える武器である」ということを確認し合いたいと思います。

まずは、２０２４年地方自治研究賞で最優秀賞を受賞された縄田さん、論文『安くて美味しい直営給食のすすめ』は大変刺激的な内容でした。執筆の動機は何だったのでしょうか？

ふとした疑問から浮かび上がったテーマ

東京都庁職員労働組合・福祉保健局支部 書記長
縄田 大輔
なわた だいすけ
2024年 地方自治研究賞・論文部門「優秀賞」（最優秀賞）受賞

縄田 きっかけは、現場の切実な「人手不足」でした。私の所属する支部の直営調理職場で、非常勤職員の欠員が続き、現場は限界を迎えていました。「常勤職員を採用してくれ」と訴えても、当局は「委託の方がコストが安い」の一点張り。「そんなに心配なら、お前らが常勤を再開させてみろ」と言わんばかりの対応に、悔しい思いをしていました。

そんな折、ある委託職場での入札が不調になり、委託料が跳ね上がったという話がありました。調べてみると、その額なんと1億円。「1億円もあったら、一体何人の職員を正規で雇えるんだ？」と考えました。そこで、「委託＝経費削減」という神話はすでに崩れているのではないかという仮説を立て、徹底的に数字を調べました。同時に、直営だからこそできる「個別の対応力」や「質の高さ」を現場の仲間にヒアリングし、論理と現場の声を掛け合わせたのが今回の論文です。構想から執筆まで、怒りにも似たエネルギーで一気に書き上げました。

松村 「経費削減」と「質の向上」、その両面から直営の優位性をデータで示した素晴らしい内容でした。この成果を、今後どう運動につなげていきますか？

縄田 まだ「運動」として大きなうねりにはできていませんが、職場の窮状を単なる「感情論」ではなく「データ」で裏付けられたことは大きいです。当局に対して、「人が足りないから何とかしてくれ」と泣きつくだけでなく、「直営の方が合理的である」と突きつける材料ができました。自治研活動は、単なる研究発表ではなく、私たちの労働条件や職場を守るための強力な「論拠」を作る活動でもあると実感しています。

活動の原点は「危機感」

松村 続いては、「職場実践としての自治研」を牽引されている東京清掃労組の松永さんにお話を伺います。昨年提出されたレポートにある「自分たちの仕事は自分たちで創る」という言葉に、清掃のプロとしての強い誇りを感じました。活動の原点はどこにあるのでしょうか？

松永 私たちの活動の原点は、強烈な「危機感」です。かつて清掃事業が東京都から特別区へ移管される際、「自分たちの職場がなくなるのではないか」「公務員としての身分はどうなるのか」という不安が職場を覆いました。生き残るためには、これまでのやり方を漫然と続けるだけではダメだ。地域住民の理解と信頼を勝ち取り、「なくてはならない仕事」だと認めてもらわなければならないと痛感したのです。

東京清掃労働組合・
練馬総支部 執行委員長
松永 公爾
まつなが こうじ
2024年 地方自治研究賞・レポート部門 応募

「ふれあい収集」などの取り組みもそうです。ごみ収集車がいっぱいになり、清掃工場へ搬出に行く間、現場に残った職員が何をするか。ただ待っているのではなく、集積所の清掃を行ったり、ごみ出しに来た高齢者や体の不自由な方に声をかけたりする。現場にいる私たちだからこそ気付ける「地域の困りごと」にアプローチし始めました。これが、住民との信頼関係を築く第一歩でした。

松村 現場の職員だからこそ、地域の福祉的な課題への気付きにつながる。全国の先進事例を学ぶ視察活動も活発にされていますが、狙いはどこにあるのでしょうか。

松永 ２００５年の札幌市から、大阪、京都、座間など、全国の仲間の取り組みを視察し続けています。今の時代、インターネットで事例を調べることは簡単です。しかし、「なぜそれを始めたのか」「どんな失敗があったのか」「当局とどう交渉したのか」という生の声は、現場に行き、仲間と膝を突き合わせないと聞けません。持ち帰った情報は、当局との交渉で「他都市ではこうやっている。私たちもできるはずだ」と提案する強力な武器にもなり得ます。受け身で指示を待つのではなく、様々なやり方を知り、仕事を創っていく。それが私たちのスタイルです。

地域とともに歩む「協働」を自治研の中心に

西東京市職員労働組合・
西東京自治研センター
後藤 紀行
ごとう のりゆき
2009年 地方自治研究賞・自治研活動部門「優秀賞」（最優秀賞）

松村 西東京市職労の後藤さんは、地域住民や「子ども食堂」との連携を進めています。行政の枠を超えた活動のきっかけは何だったのでしょうか？

後藤 大きな転機は、東日本大震災での福島県新地町への支援活動でした。現地で私が目にしたのは、役場と住民が一体となって復興にむかう姿でした。仮設住宅の建設に土地を提供する住民がいたり、町ごと移転を決断したり。そこには行政主導ではない、本当の意味での「協働」がありました。「もし東京で災害が起きた時、僕たちのまちはこうなれるだろうか？」と自問しました。まちづくりは行政だけではできません。それを痛感し、２０１４年に組合センター」を立ち上げました。労働組合がハブとなり、環境団体や福祉団体、市民と一緒に地域課題の解決に取り組む拠点です。コロナ禍で生活困窮者が急増し、市役所の窓口に長蛇の列ができる中で、地域の「子ども食堂」がセーフティネットとして機能しているのを目の当たりにしました。「行政の手が届かないところを市民が支えている」。ならば、私たちもそこに飛び込み、一緒に汗をかくべきだと考えたのです。

松村 住民とともに地域課題を解決することが、結果として公共サービスの質を高め、私たちの職場を守ることになるんですね。

後藤 その通りです。実際に、児童発達支援センターで民間委託の話が持ち上がった際、職場の問題をまとめた自治研レポートがきっかけとなり、委託が止まった事例があります。自分たちの仕事の価値を社会に発信し、住民を味方につけること。それが、結果として自分たちの職場を守る最大の防御になるんです。

松村 三者三様のアプローチですが、共通するのは「現場の力」であり、自ら動いている点です。皆さんにとって、自治研活動の「本質」とは何でしょうか？

縄田 私は「やりがいの追求」だと思います。最近の退職理由を見ていると、「仕事がつまらない」「上から言われたことだけをやらされる」という声が多くあります。納得いく仕事がしたい、誇りを持って働きたいというのは、もはや賃金や休暇と同じくらい重要な「労働条件の一つ」です。自治研は、労働組合だからこそ日々の業務のしがらみや空気を読んだ提案に落ち着く必要はなく、「こうあったらいい」を自由に考え、提案できる場です。それは自分自身のメンタルを守り、仕事へのモチベーションを保つためにも大切な取り組みだと感じています。

松永 昔、職場の先輩に言われた言葉があります。「あなたはどこに根付いて生きていくかを考えるのを忘れちゃだめだよ」と。私たちは縁あって選びの仕事を選び、この地域で働いています。この仕事を通じて何を探求するのか、地域にどう貢献するのか。それを深掘りできるのが自治研です。清掃の仕事は毎日続きますが、ただ漫然とごみを集めるのと、「この地域の暮らしを支えている」と思って集めるのとでは全く違います。その「根っこ」を太くするのが、

自治労東京都本部
書記次長
西岡 芳宏
にしおか よしひろ
（公社）東京自治研究センター
常務理事・事務局長

↙自治研活動ではないでしょうか。

後藤 地域に出て、多様な背景を持つ市民と出会い、ともに活動する。そうすると、役所の中にいるだけでは見えなかった景色が見えてきます。「ありがとう」と言われる経験や、地域の課題を肌で感じる経験は、職員としての視野を広げ、人間としての幅を広げてくれます。それが巡り巡って、より良い仕事、より良い公共サービスにつながっていく。人が育てば、町も育つ。そのサイクルを作ることが自治研の本質だと思います。

松村 素晴らしいお話をありがとうございます。とはいえ、読者の中には「難しそう」「論文なんて書けない」「時間がない」と感じている組合員も多いと思います。どうすれば最初の一歩を踏み出せるでしょうか？

西岡 なかなか自治研が盛り上がらない、レポート・論文の本数が下降している。その要因としては、「地方自治研究」という名前が硬すぎるという側面もあります。「財政分析」とか「立派な提言」と構えてしまう。でも、入口は「ここがおかしい」「もっとこうなったらいいのに」「なんでこんな無駄なことしてるんだ」、という種でいいんです。それを書き出してみる。それが自治研のスタートです。２０２６年のふくい自治研にむけて初めての人でも出しやすい「エントリー部門」の設定も検討していますら、思いを吐き出してみてください。特効薬はもちろんないのですが、今回に関しては福井で開催されるということも含めて、初めてレポートとか論文を出してくれる人たちに、レポートを書いて福井に行こうという働きかけをしています。皆さんのお話にも出てきたように、やはり出向いて見てみるもの、熱量も含めて感じ取るものっていうのは非常に多いと思います。入口としてはそんな堅苦しい文章じゃなくていい。自分たちが今職場で感じていることを出してみる。そして、ぜひ福井に行って、全国の仲間の熱量を感じてほしい。「自分たちと同じことで悩んでいる仲間がいる」「こんな解決策があったのか」と、必ず勇気付けられるはずです。

松村 気になったことをまずは書いてみる。ぐっとハードルが下がりますね。最後に、明日からできるアクションとして、読者へのエールをお願いします。

縄田 私の支部では年明けに「誰ひとり取り残さない福祉」をテーマに座談会をやります。これも立派な自治研活動です。まずは職場の仲間と「これって変だよね」と愚痴を言い合うことから始めましょう。一人で悩まず、言葉にして共有する。そこから何かが生まれます。ともに頑張りましょう。

松永 まずは自治労本部の自治研のウェブサイトを見てみてください。そこには過去の膨大なレポートが蓄積されています。堅苦しいものばかりじゃありません。「これ、うちの職場でも使えるかも！」というヒントが必ず転がっています。それをネタに、職場で雑談してみてください。そこから世界が広がります。

後藤 僕らはこれからも子ども食堂や講演会など、いろんなイベントを仕掛けていきます。まずは「覗き見」でいいので、遊びに来てください。仕事以外の顔で地域とつながると、また違う世界が見えてきます。仕事が大変な時こそ、外の空気を吸うことでモチベーションが保てることもありますよ。

松村 本日は長時間にわたり、ありがとうございました。今回のお話で、自治研は決して机上の空論ではなく、より良い仕事と働きやすい職場を自分たち自身の手で「創造」する、労働組合にとって最もクリエイティブな活動であることが確認できました。縄田さんの「政策という武器」、松永さんの「職場という土壌」、後藤さんの「地域という繋がり」。この3つの視点は、これからの私たちにとって欠かせないものです。

この記事を読んだ組合員の皆さんが、職場や地域でふと感じた「なぜ？」や「違和感」を大切にし、それを最初の一歩に変えてくれることを期待しています。そして２０２６年、福井の地で、皆さんの熱い思いが詰まったレポートに出会えることを楽しみにしています。

新春 クロスワードパズル

◎タテ・ヨコのカギをヒントにパズルを解き、A～Eの文字をつないでできる言葉を答えてください。

● タテのカギ

1. 森林にするために木を植えること。
2. 周りよりへこんだ所。くぼんでいる所。
3. 工業・土木建築などの専門的な技術を身に付け、それを職業にしている人。エンジニア。
5. 竹の根元に近い部分で作った縦笛。
6. うでの付け根と胴の間。
7. 疲れること。
9. 地球の周りを約一ヶ月で回っている衛星。
10. 大勢がいっしょに歌うこと。
13. 材木を積み上げること。木片を積んでいろいろな形を作る遊び。また、そのような木片のおもちゃ。
14. 飲み物・食べ物が舌にあたえる感じ。
15. 学校で「読む・書く・話す」言葉の学習をする科目。
16. 子供が遊びに使う小さなガラス玉。
18. 英語で高くそびえるような建物のこと。
19. 物事を決めるもの。
21. 円形や球形に近い形。句点。
23. 夏から秋に咲く、ピンク色のハイビスカスに似た花。
25. 出席の○○を確認する。
27. 実際以上に美しく考えること。実際以上に美しく表現すること。

● ヨコのカギ

1. 空気などの気体がまったくない空間。空気を抜くこと。
4. かみをすいたり、かみ飾りにしたりするもの。
6. たたみをしいた日本風の部屋。
8. 靴をみがくこと。また、それを職業とする人。
11. 熱やショックによって、急に爆発する薬品。
12. 便利な器具・機械。「文明の○○」
13. 一緒に行くこと。また、その人。同伴者。
14. 同じ場所で両足を交互に踏み下ろすこと。
15. 東から吹いてくる風。
16. 容姿の美しい女性。美人。
17. 自分の家に帰ること。
19. 英語でカギのこと。
20. 体が大きくて、首と足が長い。足の速い動物。
22. 輪の形をしたひも状のゴム。
24. 田んぼや小川に生息する小さな淡水魚。
26. 紅色の宝石。
28. 労力と時間。
29. 人や動物の、口やあごのまわりに生える毛。

回答	A	B	C	D	E

景品
★商品券（10,000円分）　5名
★商品券（3,000円分）　40名

応募方法
◎締切2026年1月28日(水)
▶記載のQRコードをスマートフォンなどで読み取り、必要事項を入力のうえ、ご応募ください。当選者の発表は、発送をもってかえさせていただきます。

第41回　地方自治研究全国集会「ふくい自治研」

2026年10月2日(金)～3日(土)
メイン会場：フェニックス・プラザ（福井市）

自治研HPはコチラ

ふくい自治研案内ページ

レポート（論文）募集も近日開始！
今回から初めて応募される方の部門を創設！
みなさんの「思い・悩み」かたちにしてみませんか？

Best Shot Competition

第28回 ベストショットコンクール

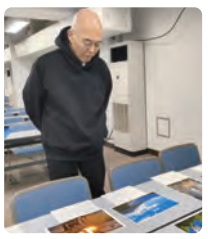
部門 1 一般部門（テーマ「想い」「輝き」「希望」）　部門 2 ネイチャー部門

講 評

今回は比較的撮影の意図がはっきりしている作品が多かったです。気になる点もあったので指摘しておきます。非常に硬い話になるので、我慢して読んでみてください。美は2種類に分けられます。ひとつは内容としての美、もうひとつ形式としての美です。以下にこれらの美を説明します。内容としての美：芸術は真理を伝える媒体である。感覚を通じて真理を掲示するものである。形式としての美：内容の価値とは関係なく、見た目や形が美しいもの。そして、あなたが撮影した写真に、これらの2種類の美がバランスよく含まれるとその写真はあなたにとって満足できる作品ということです。では、このようなことがどうすれば出来るのかという事を二人の偉大な写真家が語っています。ウォーカー・エヴァンスとスティーブン・ショアです。二人は対談しているわけでは無く、過去のエヴァンスのインタビュー記事を読みショアが語っているという形式です。エヴァンスは語ります。「直感的に（写真を）撮った後、その写真が実際の瞬間を“超越”したものでない限り、私は何もしなかったということになるので、その写真は破棄します」そして、この発言を受けて「“超越”の瞬間に起こるある種の「乗っ取り（taking over）」（この翻訳があまり良くないので「引き受ける」と言い換えます）。この「引き受ける」という感覚は長年私自身も撮影の際に感じるものだった」とショアは語ります。（IMA9月号2021）つまり、超越や引き受けるということは、撮影の場で撮影者が独り相撲しているのではなく、被写体との一種の合体のようなことが起こるということだと思います。この感覚は、プロもアマも関係ありません。アマのほうが起こりやすいかもしれません。今後、撮影時に自分の中でこの感覚が立ち上がってきたかを確認してください。それがあなたと被写体の合作です。

●各受賞作品の選評はHPにて

写真家　鈴木 邦弘さん



雑誌を中心にフリーの写真家として活動。『自治労通信』および『世界』などにドキュメンタリー写真を発表。93年「森の人・PYGMY」で第18回伊奈信男賞を受賞。日本写真芸術専門学校主任講師。日本写真家協会（JPS）会員。

最優秀賞　選評

「秋の日」　ネイチャー部門

立川市職労　渡邊 美穂さん

選評●色づいた木々の間から木漏れ日が差し、ブランコとジャングルジムで子どもたちが、楽しそうに遊んでいます。何気ない秋の日のスナップ写真のように思われます。しかし、作品をよく見てください。色の構成と子どもたちの配置です。まず、色を見てみましょう。紅葉した木々の赤や黄色が画面の上部に広がっています。そして、画面の中央部は遊具の色が紅葉の上部とつながり、遊具の青色は地面の青みがかかった黒色の影につながります。そして、子どもの配置は左右に配置され、重なりもありません。作者の対象を見る目の確かさが光った一枚です。

優秀賞

「流星群」　一般部門 輝き

町田市職労　守屋 涼さん

優秀賞

「夜明け」　ネイチャー部門

葛飾区職労　鈴木 篤さん

佳　作　一般部門 輝き

「ネオトーキョー」

練馬区職労　小城原 淳さん

佳　作　一般部門 輝き

「リトアニアでの祝福の瞬間」

八王子市職　笠松 亜也加さん

佳　作　ネイチャー部門

「ニッコウキスゲ」

江戸川区職労　田淵 美香さん

特別賞　ネイチャー部門

「窓が画に」

東交　深川支部　戸髙 弘貴さん

※各作品タイトルについては応募者の表記を尊重し、掲載しています。